

福島敏夫随筆集『乙戸南雑話「花鳥風月および星・虹月および星・虹を愛でながら」

主宰論説 55

3つの山：英彦山、立山(雄山)、雲取山

日本の山で、北海道利尻岳、山形県の月山、北アルプスの穂高岳、鳥取県の大山、鹿児島県の開聞岳など、日本100名山に数えられる、他に有名な山は沢山有るが、ここでは、特に、英彦山、立山(雄山)、雲取山の3つを取りあげて、その景勝、それに関わる逸話、名所・旧跡として訪れた思い出について、まとめておきたいと思い、ここで述べるものである。この3つの山は、古来、山岳信仰の源にもなってきた。ただ、私自身は、実際に、山に登ったことは少なく、遠くからその英姿を仰ぐことの方が、多かったかもしれない。

1) 英彦山：

英彦山は、福岡県と大分県の県境近くある山脈の主峰として知られ、北岳、中岳、南岳の3つの峰からなっている。古来、修験者信仰(山伏信仰)の山として知られている。遠賀川の上流地域にあって、そこでの大雨が降ると、下流の遠賀川流域で氾濫や洪水が起こり、その治水に苦慮したようである。北九州市立大学に初めて赴任したころ、九州の主立った私学のメンバーの主宰する夏期セミナーに呼ばれて、南阿蘇鉄道の立野近くの木造イベントセンターで、講演したことがあった。遠賀川流域を塗って、自家用車で、会場まで赴いたが、田川市を抜けて、目的地までゆくときの道標になっていたようである。夏季セミナーの講演で、「環境調和型材料、環境調和型材料設計、環境調和型生涯設計」の3点セットについて、紹介したことが、懐かしく思い出される。

2) 立山(雄山)：

立山(雄山)は、剣岳とともに、立山連峰を形成する主峰で、富山県の最高峰であり、海拔3015mの高さを誇る。立山信仰の対照にもなり、立山曼荼羅の神仏習合信仰の源にもなっている。高校の頃、夏期の集団登山の時に訪れたが、体が弱く、山道を這って歩き、同級生等に多大な迷惑をかけたが、その山頂で、遠く、北アルプスの山々を見たとき、感動を覚えたことが、思い出される。室堂までは、バスで行くことが出来、登山の道程は、かなり、短縮しているが、昔は、もっと下の上市方面から、徒歩で登っていた。雄山の頂上まで行くのは、大変だったようだ。みくりが池の花畑、称名の滝などの観賞スポットで知られている。昭和の名流行歌「青い山脈」に出てくる「青い山脈、輝く峰の懐かしさ、見れば涙がまたにじむ」という歌詞の、輝く峰を連想させるのも、感慨深い。

3) 雲取山

東京都は、関東平野の一都6県の要として、平坦な平野部が多いように思われがちであるが、海拔ゼロメートル地帯の江東区から、23区を経て、西の多摩地方まで、かなりの高低差がある。雲取山は、東京都の最も西に位置する海拔2000m近くの最高峰の山である(23区でも、紀尾井坂、紀ノ國坂、菊坂などの名前もあるように、かなり、起伏に飛んでいる)。学生時代、女学生も交えて、数人の人数で、この雲取山を登山したことを、かすかな記憶として残っている。ただ、うっそうと茂る山林の間の山道を歩いたはずだが、約60年前にもなるので、日帰りコースだったか、どのような山道を通ったのかは、定かでない。今は、雲取山山荘を利用した1泊2泊コースが、定番のようである。この山頂からは、山梨側、埼玉側への眺望は、抜群で、富士山の姿も、遠景に見えるようだ。